

くまもとアートポリスシンポジウム報告書

都市にデザインを、田園にアイデアを

熊本県

1995年8月25日 八代市厚生会館にて開催

K・A・P

くまもとアートポリスシンポジウム

テーマ	建築が「まちづくり」に果たすべき役割
日時	1995年8月25日(金) 13:30~16:30
会場	八代市厚生会館

参加者：約800名

主催：熊本県、八代市

後援：建設省、熊本県市長会、熊本県町村会、(社)日本建築学会九州支部熊本支所、(社)土木学会西部支部「土木の日」熊本実行委員会、熊本まちづくり協議会、(社)熊本県建築士会、(社)熊本県建築士事務所協会、(社)新日本建築家協会九州支部熊本建築家の会、(社)熊本県建設業協会、八代経済開発同友会、(社)熊本県建築士会八代支部、八代建築設計監理協会、(社)熊本県建設業協会八代支部、八代建設業協同組合、八代建築技能士協同組合、熊本日日新聞社、NHK 熊本放送局、熊本放送、テレビ熊本、熊本県民テレビ、熊本朝日放送、エフエム中九州

くまもとアートポリスシンポジウムプログラム

主催者挨拶	福島譲二 熊本県知事 沖田嘉典 八代市長
来賓挨拶	梅野捷一郎 建設省住宅局長
基調講演	
テーマ	公共建築への提案
講演者	伊東豊雄 八代市立博物館未来の森ミュージアムほか担当建築家
パネルディスカッション	
パネリスト	伊東豊雄 坂本一成 熊本市営託麻団地担当建築家 元倉真琴 熊本県営竜蛇平団地担当建築家

くまもとアートポリスシンポジウム

司 会 ただいまから、熊本県及び八代市の主催によります「くまもとアートポリス・シンポジウム1995」を開会いたします。昨年度は蘇陽町でシンポジウムを行い、今回が8回目のシンポジウムにあたります。

今年度は博物館の建設をきっかけに、まちづくり推進の気運が高まっております。ここ八代市で開催することになりました。それではまず、開催にあたり、熊本県知事福島譲二の代理として、熊本県副知事の魚住汎輝が御挨拶を申し上げます。よろしくお願いします。

魚 住 汎 輝 皆様こんにちは、副知事の魚住でございます。本日は知事が所用で出席できません。知事のメッセージを届けさせていただきます。



本日は残暑の厳しい中、くまもとアートポリスシンポジウムに多数の御出席をいただき、誠にありがとうございます。また、建設省市街地建築課課長補佐坂本努様をはじめ、講師の先生方には、大変お忙しい中御出席をいただきまして、厚く御礼を申し上げます。

くまもとアートポリス事業は、建築物等の設計にあたり、国の内外を問わず、新進気鋭の建設家、デザイナーの方々に、後世に残る文化的資産を設計していただき、県民の環境デザインに対する関心を高めることを目的として進めてまいりました。第1号の熊本北警察署以来、現在対象の建築物は52件に及び、この中には清和村の清和文楽館や、産山村の花の温泉館のように、地域づくりの核として有効に活用され、地域の振興やイメージづくりに一役買っているものも少なくありません。

当八代市においても、八代市博物館未来の森ミュージアムが4年前に完成をし、今では八代を代表する施設のひとつとして、市民の皆様に愛されていると聞いております。また、市ではこの博物館を設計され、本日もシンポジウムの講師をお願いいたしました伊東豊雄様を市の地域デザイナーとして迎えられ、次々と八代市の新しい顔を作り出しておられます。このことは、アートポリスを機に、地域と建築家との交流が行われた例として、非常に注目をしているところでございます。

このように、県内各地でアートポリスが実績を上げています中で、来年にはこれら事業の成果、アートポリスを核とした様々なまちづくりを、世界の建築文化とあわせて紹介する、国際建築展くまもとアートポリス'96を開催することとい

たしております。

本日のシンポジウムは、このくまもとアートポリス'96を控えまして、本構想をさらに多くの方々にご理解をいただき、より一層の推進を図るため、また、アートポリスによる地域への波及効果が著しい八代市を広く紹介するため、八代市と共催で企画をさせていただきました。

特に、シンポジウムと合わせて企画いたしました市内バス停のデザインコンペティションでは、大変な反響を呼び、海外からの応募も含めまして700点の作品が寄せられたところでございます。応募された皆様方、及び審査にあたられました方々には、改めて御礼を申し上げる次第でございます。

県におきましては、来る21世紀に向け、生活環境に配慮した文化の香り高い豊かな地域づくりを進め、熊本ならではの新しい生活文化の創造に最大限の努力を払っているところでございます。その具体的な施策のひとつであるアートポリス構想の推進につきまして、今後とも県民の皆様方の一層の御理解、御支援をお願いする次第です。

最後になりますが、本日のシンポジウムが実り多いものになりますことを祈念いたしますとともに、来年はくまもとアートポリス'96を開催いたしますので、皆様方の御協力をお願い申し上げ、私の挨拶といたします。

平成7年8月25日、熊本県知事福島譲二、代読でございます。どうもありがとうございます。

司 会 どうもありがとうございました。

続きまして、地元八代市長の沖田嘉典が御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

沖田 嘉典

ただいま御紹介をいただきました当八代市の市長でございます。よろしくお願いいたします。今日は残暑厳しい中でございます。一昨日ぐらいまでは、当八代は酷暑というに相応しい暑さでございました。昨日、今日、少し雲も出てまいりまして、しのぎ易くなつてはきておりますけれども、そのような中で御多忙中、大変皆さんお忙しい中、今日は地元の皆さんをはじめ、全国の各地からこのように多数の皆さん方が御出席をいただいたわけでございます。誠にありがとうございます。

こうしてたくさんの建築のスペシャリストの皆さん方と、八代の市民とが交流を深めまして、お互いにまちづくりの知恵を出し合つて、より魅力的な町にしようと、一堂に会する機会をこのように得ましたことは、地元の市長といたしましてこの上ない喜びでございます。



先ほど熊本県知事さんのほうから御紹介がありましたように、くまもとアートポリス、これは後世に残し得る文化資産の創造、というものを目指しての事業でございます。この八代市では、いち早くその趣旨に賛同をいたしまして、これまでにアートポリスに参加した事業というのは52でありますけれども、このプロジェクトの中で、私どもの八代市は5番目に名乗りを上げまして、この協のほうに建っておりますが、市立博物館未来の森ミュージアム、このようなタイトルであります。博物館を皮切りに積極的に取り組みました。今日は、先ほどちょっと御挨拶申し上げましたように、全国各地から建築に関係のある皆さんがお集まりということでございますから、八代市のこともちょっと披露しながら御挨拶としたいと思います。

御承知のように、これは九州縦貫道がこの間、先月ですか、青森から鹿児島まで、えびのというところの、6,200mのトンネルが完成いたしました。いよいよその九州縦貫道は、日本全国が1本の高速道路でつながったわけでございます。その縦貫道のひとつに八代のインターが、すぐ山のところでございます。また、新聞等で既に御承知のように、九州新幹線、鹿児島新幹線というんですけれども、これが今、県下挙げて、地域挙げて積極的をお願いをしているわけでございます。これも大体10年先にですね、新幹線は完成するということになっていきます。

八代と鹿児島間は既に着工いたしておまして、今回の平成8年の予算には、非常に大きな予算が付けられたようでございます。八代と鹿児島間は平成13年に完成ということになりますから、あと5、6年のうちには完成する。しかし、全体の八代から博多間は、向こう10年以内にはこれを完成しようということでありまして、これは陸の玄関と私どもは称しておりますが、今度は海の玄関といたしまして、現在まで3万トンの船が着岸できる港をですね、これは平成13年までに、大体平成12年ぐらいまでに完成するということで、鋭意事業が進行しておりますけれども、今度の港の開発計画によりまして、八代の3万トンが5万トンに格上げになりまして、港湾のほうで市議会で決めていただきましたから、この5万トンの港は九州では最も大きな、特にコンテナヤードを専門に扱うというような港でございます。九州では1番大きい、寧ろコンテナヤードを扱うには、これは日本でも有数のものであると、こういう方向を持っておるわけでありまして、この5万トンの港は、やはりここで決定いたしまして10年以内に完成をするということになります。

と申しますと、新幹線の駅と、それから5万トンの港と、両方を核といたしまして、この八代は現在11万の人口でありますけれども、どれくらいに発展してい

かせるか、どれくらいの受け皿を作るか、これは私ども行政に課せられた大きな課題でありますけれども、これがやはり九州の中心として、全体では国の、西日本の大きな目玉になるように、私達は頑張っていく上では、まちづくりも今から着手していかなければならないと。せっかく新幹線の駅ができ、5万トンの港ができたのに、何の対応もできなかったのでは、これは致し方ないと思ひまして、あらゆる部分から手を付けはじめておるわけでございます。

でありますから、今のアートポリス、3点セットと申し上げましたけれども、これも今日お話に、シンポジウムに参加されます伊東先生の作品でございます。3点、博物館と、それから八代広域行政組合消防本部ですね。それから養護老人ホームの保寿寮と。大変性格の異なるもの3つ、今の伊東先生に設計をお願いをいたしたわけでございます。

これからも、そうした特にまちづくりの核となるようなものを、やはりこれから考えていかなければならないと、私どもの街は、言うならば流通産業というもの、もうひとつは観光産業と、これからの方向になると思いますけれども、その中での流通産業の中でのひとつの核、観光にもつながるような、そういうものをも考えながら、少しずつ進んでいくということを思っているわけであります。この3つの建物をまちづくりのネットワークの要として、これは位置付けをいたしまして、先生たちに積極的に参加を、助言をいただいているわけでございます。

これで終わったわけではありまして、3点で終わったわけでもありまして、これからそうした建物は、やはり芸術作品であったり、あるいは観光につながるものであったり、そういうことを積極的に取り組んで、これからですね、いかなければならないと、このように思います。

おかげさまで、この博物館は熊本景観賞というのをいただき、を、はじめとして、数々の賞に輝いております、また、この3点セットのですね、アートポリスの延長線ということにもなりますが、市営住宅を地元の設計事務所をお願いをいたしまして、これは市営住宅西片町団地建替事業と、こういうタイトルでございます。市営住宅を建て替えました。これがですね、建設大臣の受賞をすることになりました。八代独自の新しい文化創造、大変取り組みが高いよと、こういうふうに褒められまして、評価を受けたわけでございます。

今日のシンポジウムに先駆けまして、これはデザインコンペティションというのをいたしております。ところが、海外からも国内、全国各地から、700点にも上ります応募がありました。県当局をはじめ、関係各位にこれは厚く御礼を申し上げます次第でございます。このことにつきましては、このデザインコンペティシ

ンにつきましては、また別の方から詳しくご説明があると思います。これらの作品については、八代市のこれは貴重な財産といたしまして、今後のまちづくりに有効に活用してまいる所存でございます。

こうした実績を積み重ねながら、私どもは今後とも創意と工夫を重ねて、より個性を活かした潤いのあるまちづくり、地域づくりに積極的に取り組んでまいりたいと思います。本日御講演をいただきます伊東先生をはじめ、パネリストの坂本、元倉両先生におかれましては、これから先どうぞよろしく御提言、御助言をお願いを申し上げます。

本日のシンポジウムが、八代市はもとより、参加いただきました皆さん方にとりましても、これが有意義でありますように祈念をいたしまして御挨拶といたします。よろしくお願いいたします。

司 会 ありがとうございます。続きまして、御後援をいただいております建設省から、住宅局長梅野捷一郎様に御挨拶を頂戴する予定です。本日は代理として、市街地建築課課長補佐坂本努様に御出席いただく予定なのですが、飛行機の都合で少々遅れていらっしゃいます。お見えになられましたら後ほど御挨拶を頂戴したいと存じます。

それでは、先に実施いたしましたデザインコンペティションの表彰に移りたいと存じます。このコンペティションは「八代市中心市街地に建つ、公園施設としてのバス停」という課題で募集いたしましたものです。国外からも含め、先ほど挨拶の中で触れられましたが、700点もの応募がございました。後ほどパネルディスカッションに御出演いただきます3人の講師の先生方に審査員をお願いをいたしまして、1次、2次の審査で10点に絞り込まれ、本日午前中の公開審査で各賞が既に決定しております。最優秀作品は実際に建設する予定ですので、皆さん楽しみにお待ちしておりますと存じます。

それでは、受賞者の皆様方を御紹介いたします。最優秀賞を受賞なさいました熊倉洋介さん、よろしくお願いいたします。続きまして、優秀賞を受賞なさいました高森和志さん。同じく優秀賞を受賞されました佐々木竜郎さん、白石良江さん、西川賢治さん。それから優秀賞、もう一方、西沢大良さんですが、本日都合により御出席いただけません。それから、佳作を受賞なさいました6名の方ですね、大竹海さん、それから鈴木基紀さんと坂下兼三さん、それから塩塚隆生さん、それから藤村憲之さんと神山早苗さんは今日御都合により御欠席でございます。それから谷口博明さんと倉本琢さんも今日御欠席でございます。それから、同じく佳作、最後の方です、上原慶久さんと篠崎建志さん、よろしくお願いいたします。



それでは、八代市長から表彰をお願いいたします。

(表彰式)

司 会

どうもありがとうございました。大変すばらしいデザインを提案なさいました入賞者の皆さんに、もう一度盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

このデザインコンペの1次審査を通過した作品はロビーの前に展示してございます。休憩時間などを利用して御覧くださいませ。

それでは、第1部の基調講演に入らせていただきます。「公共建築への提案」と題して、建築家の伊東豊雄さんにスライドを交えて御講演いただきます。

伊東さんは皆さん御存知のとおり、八代市立博物館未来の森ミュージアムをはじめ、八代市内のギャラリーエイト、養護老人ホーム保寿寮、それから八代広域行政事務組合消防本部を設計され、今や八代に最も縁の深い、日本を代表する建築家でいらっしゃいます。詳しいプロフィールはお手元のチラシをご覧ください。

なお、講演の中でスライドの上映がございます。スライド上映中のフラッシュ撮影は、ほかのお客様の御迷惑になると思いますので御遠慮ください。

それでは伊東さん、よろしくお願いいたします。

伊 東 豊 雄



ただいまは八代市のバスストップのコンペティションに入賞された方々、おめでとうございました。私も今朝ほど審査員のひとりを務めさせていただきましたけれども、ほかの審査員の坂本先生や元倉先生と、大変素晴らしいいい案が選ばれたのではないだろうかと期待を深めております。午前中お聞きになられなかった方が大半だと思いますので、ここで御紹介できないのが残念ですが、この入選案には「花籠のような」というタイトルが付いております。ちょうど大きな帽子を、花で作られた帽子を被ったように、大きなパーゴラの中にすっぽりと入ってしまうような案で、街の方々がそのバス停を大事にして、皆さんで愛してくだされるような、そんなバス停の提案ではなかったかというように思っております。

今日、市長や知事のお言葉にもございましたように、私はこのまちで88年以来3つの公共建築と、博物館につながる通町というところで、ギャラリーエイトという民間のギャラリーを含めて4つの仕事をやらせていただきました。ひとつの街でこのようなたくさんの建築を作らせていただくということは、めったにないことで、この場を借りまして心から御礼を申し上げたいと思います。建築家とし

ては幸せ者だと痛感しております。

博物館の仕事をいただき、最初にこの街を訪れましたのは88年のちょうど今頃、真夏でございました。蟬時雨の中を、現在建物が建っております場所は公園でしたが、その中を歩き回ったことを昨日のここのように思い出します。今では、時々外国の人を見かけるようになったり、アートポリスというプロジェクトによって、全国からたくさんの方が熊本にツアーを組んで来られて、その一環としてこの八代にも来てくださるようになった。私も本当に市民のひとりのように嬉しい思いをしております。

今日はですね、これら3つのプロジェクトを、どんなことを考えながら作ったかということを中心にして、私の公共建築に対する考え方をお話しさせていただけたらと思います。

スライドでご覧いただきたいと思います。市立博物館、日奈久の養護老人ホーム、それから広域行政事務組合及び消防署の庁舎、皆さん建物については大体ご存知だという前提に立ってお話させていただきますが、これら3つの建物には共通している点がございまして。八代が今日のように大変暑いところであるという私の第1印象からきてるのかもしれませんが、何か木陰のような建築を作りたいんだと考えた点です。もう少し言いますと、建築として森とか林を作ろうといったイメージが一貫してありました。

これは建築的には屋根、覆いをかけて、色々な柱でそれを支えていくとか、あるいは逆に建築自体を持ち上げてしまって、その下に我々がピロティと呼んでおります空間を作り出していくといったような手法を使っているわけです。最初の市立博物館、これは未来の森ミュージアムというその呼び方、呼称に「森」という言葉が出てまいります、この2枚のスケッチは最も初期のイメージです。その時既に小さな丘のような台地を作って、その上にたくさん木が生えているような、そんなイメージを抱いていたわけです。

特に屋根のスタディではいろんな形を考えました。最も初期の案は、たくさんの柱で屋根を吊っていくような、林のようなイメージを描いておりました。

これはちょうどオープニングの時の写真です。この芝生の上に街のたくさんの方が来てくださった、その時の写真からも、屋根が風にそよいでいる木の葉のように浮かんでいて、それがたくさんの柱に支えられているといったイメージを感じ取っていただけるかと思います。

これはこの博物館の常設展示場です。柱がランダムに立っておりまして、展示物を見ながら林の中を散策していくようなイメージを描いておりました。



ちょうど現場が始まって間もない頃、敷地に近い通町という町のまちづくりの相談を、現在熊本大学の先生をしておられます桂さんの紹介で受けました。そのまちづくりの作業の一環として、ギャラリーエイトという小さなギャラリーを設計させていただきました。これもまたピロティの形式をとり、柱によって本体が持ち上げられております。先ほどの博物館の展示室と同じような無梁板というストラクチュアになっているわけです。



それから、日奈久の老人ホーム、ここでもまた多くの部分はフラットな大きな屋根を、壁と柱で支えるような構造になっており、風が吹き抜けていく林のような空間を作ろうとしています。

内部においても、例えばこれは食堂と集会室ですが、同じように柱がランダムにたくさん立っております。



この3月に竣工いたしました消防署ですが、この消防署もまた、かなり大きなボリュームが2階に持ち上げられ、その下は全部同様な柱で支えられており、その下に消防車や救急車が並んでいたり、あるいは緑の芝生になっていたり、自由に市民の皆さんが入れる公園のような空間がこの下に作られています。

ご覧のようにいずれもたくさんの柱が林立している森や林のイメージでできているわけですが、空間の意味は少しずつ変わってきております。その辺りを今日はお話しようと思います。それが建築の公共性をどのように作り出しているかという私の考え方と直結しているのです。先ほどお話いたしましたように、博物館の場合、緑の丘のような空間を作って、周辺の環境とできるだけ調和するように、つまり、建築とランドスケープとが一体になったような建築を作りたい。つまり環境をどのように作っていくかに関心の中心があったわけです。そのために林のような空間ができたわけですが、老人ホームやこの春竣工した消防署になりますと、環境を作ることはもちろんですが、それ以上に建築がどのような働きを、建築自体がどのような働き掛けを市民に対してできるのかという、つまり、建築家の間では建築のプログラムと呼んでいるような、つまり、その建築を構成する様々な条件と、建築空間との関係が問題になってまいります。

例えば博物館の場合、一般的に収蔵庫があり、常設展示室があり、特別企画の展示室があり、そしてエントランスホールがあり、といったように、どこの博物館でも大体決まった形式、決まった空間の組み合わせででき上がっているわけです。しかし、例えば収蔵庫も全部展示室と一体になってしまったり、市民が自由に入れるような博物館になったら一体どうだろう、あるいは、コーヒーショップは必ず展示の空間とは分かれているけれども、これが一緒になってしまったらどう

なるんだろうとか、管理の空間は必ず裏側にあって、一般の人からは見えないようになっているけれども、働いている様子が全部オープンで見えるようになったら一体どうなんだろうとか、そんなことを考え出すと、博物館の建築というのはガラッと変わるわけですね。

これは面白い面と、管理している側にとっては大変やりにくい面、いろんな問題を含んでいると思います。しかし、全国で作られている公共建築の多くは、決まった形式をできるだけ維持するような方向で作られている。これをもう少し組み換えていくと、使う人にとってはもっと開かれた、新鮮な博物館ができるかも知れない。

そのような考え方を実現しようとする時に、一体どういう方法があるのでしょうか。博物館も図書館も、100年前、あるいは何百年も前から持続してきた建築のタイプを持っているわけですが、それが今のようにメディアが広く浸透していくような社会でも、果たしてそのままでいいのだろうかと考え出すと、面白い問題に行き当たるわけですね。

例えば、シティホール、市庁舎のような建物も、ヨーロッパの古い街に行くと、必ず街の中心にある。そこに住んでいる人達にとっての拠り所になる、中心になる空間であったわけですね。つまり目的地として公共建築が作られてきた。

しかし、例えばこの八代の博物館を考えていただいても、市民の人達があのマウンドの上で楽しんでいただくのはもちろんですが、そこにアートポリスのツアーの方達もかなりの割合でやってきて、公園のようなマウンドや、内部の展示を見て風のように過ぎ去っていく。何か通過点のような場所に変わってきているわけですね。

私の印象では公共建築もそうですし、都市に作られている建築が、皆が集まっていく目的地のような空間ではなくて、駅のような、どこかへ行く時に通過していくような、そんな建築に変わってきているような気がするのです。私は市民のシンボルというよりは、もう少し親しみやすい、もっと気軽に立ち寄っていけるような日常的な施設に公共建築は変わっていくべきじゃないかと思います。今までは砦のように堅固なものであったけれども、もっと開放的で、そこで働いている様子も一般の人々にわかってしまうような、そこから市民との間にコミュニケーションが生まれていくような、そんな散歩がてらに寄られるような公共建築ができないだろうかと考えています。

例えば八代の消防署で森を作るとか、林を作るとかという考え方の表れであると汲み取っていただけたらと思っています。これから先は再びスライドでもう少し具

体的にお話をさせていただこうと思います。



実は日奈久の老人ホームや八代消防署のコンセプトを作りだすベースになったのがこのプロジェクトです。これはパリ国立大学の第6分校、第7分校という大きな建物です。セーヌ川のほとりにありますけれども、この一角に図書館を作ろうというコンペティションがありました。その時の提案がこのモデルです。大変短絡的に話しますと、この楕円形部分が一種の広場なんですね。広場だけれども図書館でもあるという、矛盾した要素で成り立っているのです。

この大学の広場は既存のキャンパスのグリッドの中にあり、その中心に管理のためのタワーが建っています。管理関係の施設がこの中に収まっています。これは垂直性の高い広場です。クラシックなこの広場に対して、ここではもうひとつの広場、水平に広がっていく広場を作りたいと考えました。広場といってもここに情報が集まっている空間を作ろうとしたわけですね。図書館は学生たちにとってはコミュニケーションのスペースであるわけですから、ここで新しい情報が得られる、あるいは古い情報がストックされているような、そういう提案をしました。広場でありながら図書館でもある。従って環境をコントロールする装置としての建築が広場の上に覆い被さっているというわけです。



科学系と人文系とふたつの図書館に分かれていますから、それぞれがエントランスホールを持っていて、閲覧スペースには樹木もたくさん置かれています。木々の間の屋外のような空間で本を読み、ビデオを見る。そんな広場がここに展開されています。それに対してその上部には大きな簀の子のように閲覧室と書庫とが組み合わせられた2階の空間が、吹抜けを挟みながら並列に置かれています。

この吹抜け部分には上から自然光が入って来ます。この屋根と2階のスラブが音や光をコントロールする装置になっているわけですね。

これは透明な模型ですが、これは単にガラス張りの建築を作りたいということではなくて、広場であると同時に、そこが本を読む場所でもあるという二重の性格を持たせたい。そのようなふたつの性能が重なって、相互に影響を及ぼす。そのためにそれぞれが透明で重なり合っていることを表現するために、このような模型が作られたわけですね。



やや抽象的な話になってしまいましたが、これは老人ホームの最初の提案です。ここでは今の図書館と同じ考え方が採用されています。このホームに住む方だけではなくて、日奈久の街にたくさんのお年寄りが住んでおられますから、そういう人達がここに自由に入ってこれるような広場を作って、ここでゲートボールなども行われる。同時に、その上部には食堂や集会室があったり、あるいは個室

が並んでいて、広場と50人の方、お年寄りが住むという行為が同時に重ね合わされる、そんな老人ホームが成立しないだろうか考えたわけです。

現実には、背後に高速道路が通るというような条件もあり、できるだけ遮音性能を上げるために、既存の町のほうに建物を寄せたほうがいいか、あるいは個室と食堂や集会室が近いほうがいいというような条件から、2棟は廊下を挟んで結ばれましたが、基本的な考え方は同様なコンセプトで成立しているわけです。

これは実施された案のプランです。楕円形の広場に代わって、既存の街から歩道橋で川を渡って、直接エントランス・ホールに入り、そのまま海へ抜けていくようなルート、あるいは街の人たちが集会時やゲートボールをしに訪れた時に直接入れるような中央のエントランスが作られました。建物の長手方向の移動に対して直角方向に抜けていくような空間を作って、相互に影響しあうことによって、一般の人にも開かれた老人ホームを作りたいという考え方を実現したいと考えたわけです。



この中央の抜けているところにおじいさんやおばあさんたちが集まって、日奈久の街をいつも眺めています。その脇には自分たちで育てた植木が置かれています。

これは老人たちが集会室に集まっている時の様子です。管理する方にとっては、外部の人がここに入ってこられることは、非常に面倒なことかも知れませんが、住んでおられるおじいさんやおばあさんにとっては、若い人たちがこの施設を訪れてくれるのは、大変楽しいことではないでしょうか。

これはお風呂場の脇でテレビを眺めているお年寄りたちですね。お年寄りたちができるだけ個室にいないで、こういう小さなコーナーへ来てコミュニケーションができるように考えました。

このホームに住むひとりのおじいさんはほとんど毎日、このデッキの先端に坐って夕日が沈むのを眺めておられます。このきれいな八代の海がこの建物にとっては、非常に重要なファクターですから、海へ向かって伸びている印象をどうしても作りたかったわけです。



数年前からベルギーのアントワープという町で、都市計画的なスケールの仕事に関わって来ました。その時に考えたことと今お話ししたことは一致しているわけです。これは古い鉄道の操車場の跡地で約30haぐらいあります。その隣に、運河のほとりですけれども、長さ1km、幅60~70mの古いドックの跡地があります。このドックの跡地に我々が提案したことは、ドックの元の深さ、平均8mぐらいありますが、その深さまで掘り下げてしまう。埋め立てられた土地を掘り下

げ、そこをリニアな公園にしようというものでした。一方、操車場の跡地には周遊できる庭園のような空間を作ろうという提案をしました。その公園や庭園の上を建物が横断しているわけです。一方では公園であるけれども、一方では集合住宅や公共建築になっている。通常はゾーニングという考え方で、住宅地や公園とに平面的に分割されますが、ここではそれを立体的に重ねてしまうという考え方を提案したわけです。

建物の一部がトンネルのように抜けて、周遊道路が作られている様子をご想像いただけたと思います。その道路に沿って幼稚園とか老人の施設などが点在していくわけですね。

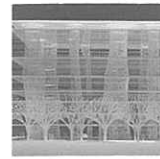
公園と別の施設とが重ね合わされることによって、公園自体も今までにはなかったような公園になるし、住宅に住んでいる人も、一步地上に下りれば公園の中に行ける。またドックの跡地には子供のためのミュージアムのような施設が提案されましたが、この場合も下が公園になっていて、その上にブリッジのような建築が横断しているわけです。そうすることによって、上下が相互に影響し合って、通常の公園とは違った機能の公園ができるようになるのです。

八代消防署はアントワープの計画と同じコンセプトで作られております。地上階には消防車、救急車が並んでおり、その上部に消防隊員の方たちが生活しておられる事務室、食堂、仮眠室などが並んでおります。そして地上階にはトレーニングのためのタワーや水難訓練用のプール、あるいは体力錬成室と呼ばれている小さな体育館の空間などが置かれています。2階には広域行政事務組合のための諸室が並べられており、それらは大きくカーブする廊下によって結ばれています。他の部屋に行くために隊員たちはいつもここを往復することになります。その時に、ガラス張りのウインドウを通して、地上階のトレーニングの様子や、そこを公園として散歩をしている市民の人たちといつも視線を合わせることになるわけです。

ここでもまた透明な模型を作ったのは、2階のファンクションと1階のファンクションとが重なって、今までにはなかったような公園ができたり、今までにはなかったような消防署ができるのではないかと思ったからです。

ここの消防署の方たちは、この施設を非常におおらかに使って下さっておられますので、一般の人たちが奥のほうまで自由に入っていくことができます。そのために、消防署の人たちが普段どんな苦勞をされておられるかが、一般の人たちには大変よくわかります。

以上が八代の3つの建築で考えたコンセプトです。最後にもうひとつ、この春、



「せんだいメディアテーク」という建築のオープン・コンペティションで、最優秀作に選んでいただきましたプロジェクトをご紹介させていただきたいと思います。ここでもまた林のような、従来よりもっと大きな林のような空間を作ろうとしており、私が現在考えていることを一番端的にこの建築で説明できると思います。

今まで林のような、あるいは森のようなと言っておりました柱は全て構造の柱でした。階段とか、エレベーターとか、あるいは設備のダクトといったようなスペースはわかれていたのですが、ここでは太いチューブのような柱を考えて、その中に垂直交通や空気の通るスペースを全部入れ込んでしまおうといった考え方はです。このチューブはちょうど竹で組んだ籠のような、スチールのストラクチャーで、その内部がほとんど空洞になっているわけです。

これは地上7階、地下2層の建築です。仙台の定禅寺通りという、樺並木が4列に渡って広がっていて、クリスマスの時期にイルミネーションで飾られる通りです。したがってこの約50m角のスラブを支えているこれらのチューブも、拡大された樺並木のような、そんなイメージに連続していくわけです。

このチューブの外側を半透明のガラスで覆いまして、一部開けることができます。従って、内部の空気が抜けていったり、あるいは外気がここから採り入れられる。そしてまた、上部からは自然光がチューブ内に伝わって落ちてきます。太いものではチューブの直径が10m近くある予定です。それは2枚の鉄板を組み合わせ薄くサンドイッチされた鉄板でつくられる予定で、造船の技術を使ってこれを作ろうと考えています。

ここで建築的な問題よりも重要なのは、この施設は図書館と市民ギャラリーが組み合わされ、それにオーディオ・ヴィジュアルの施設、あるいはハンディキャップの方のための施設、それらの組合せでこの建築を作ろうとしているわけですが、単にそれらを複合しただけではなくて、全てをミックスし、全く新しい種類の建築を作ろうと考えていることです。そして今までの図書館や市民ギャラリーが持ってきたアーキタイプと言いますか、定まった建築タイプを全て白紙にして考え直すというのがこの計画のひとつの趣旨です。

ですから、各階の平面にいろいろな提案をしておりますが、全ての階がアート・ギャラリーでもあるし、全ての階で本を読むこともできるような、それからあらゆるところで自由にコーヒーが飲めるような、そんな空間にもなるかも知れないというわけです。

従来の建築は広場があって、その突き当たりに建築がモニュメントとして控え

ていた。そういうモニュメントとしての公共建築ではなくて、もっと通過していけるような、消防署で1階が全部公園になって突き抜けていけるような、そんな建築に近いものにしたいということ。それからまた、人々の利用する空間と、それを管理する人たちが分かれているのではなくて、一体化された建築ができないうだろうかとか、ハンディキャップの人と健常者の使う場所が分かれているのではなくて、一体になって使えるような空間にしたい。ここではそういった様々なバリアを解いていくような、そんな建築を作りたいと考えているわけです。

そしてこれらのチューブ、エレベータや階段、設備コアを包含しても、8割ぐらいはヴォイドなチューブになりますので、いつも自然光や空気が流れていく。そして、夕方になりますと下からライトアップされて、チューブ自体が光の筒のように浮かび上がってきます。新しいメディア時代の空間をどのように表現できるのかを考えているわけです。

このコンペティションでは、磯崎さんが審査員長をされたわけですが、審査員長を引き受ける条件として、プログラムに対する新しい提案を応募者がすることを積極的に問い掛けてきた、そういった自由さがあってはじめて我々としても自由に提案できたといった経緯があります。アートポリスも、大変すばらしい建築、毎年建築学会賞を受ける作品が次々に誕生しているわけですが、次のテーマとしては、どのような新しい社会的な提案、プログラムに対する提案を提出していけるのか、ということが問われているような気がいたします。

また、これから坂本さんや元倉さんのお話を伺って、そのような議論を進めていきたいと思えます。とりあえず私のレクチャーはこれで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司 会 伊東さん、どうもありがとうございました。それでは、第2部のパネルディスカッションに移る前に10分間の休憩を取りたいと思えます。

(休憩)

司 会 御来賓の御挨拶を頂戴いたしたいと思えます。御後援をいただいております建設省から、住宅局長梅野捷一郎様に御挨拶を頂戴いたします。なお、本日は代理として、市街地建築課課長補佐坂本努様に御出席いただいております。よろしくお願いいたします。

坂 本 努 ただいま御紹介いただきました建設省住宅局市街地建築課の坂本でございます。本日飛行機のトラブルがございまして、大変御迷惑をお掛けしたことをまずお詫



び申し上げます。本来ですと住宅局長の梅野が参りまして御挨拶すべきところですが、所用によりまして東京を離れることができませんので、挨拶を預かってまいりました。代読させていただきます。

くまもとアートポリスシンポジウムの開催にあたり御挨拶申し上げます。現在の我が国におきましては、安全で国民一人ひとりが真に豊かさと潤いを、それから安らぎを実感できる社会の実現のため、文化性豊かで質の高い生活環境の形成が求められております。21世紀を目前に控え、安全で快適な市街地の整備、環境への配慮等の諸課題に対応し、国民のニーズに的確に応えた、将来へ継承される質の高い住宅建築ストックや、文化性豊かな美しい街並みの形成など、魅力ある空間づくりを推進していく必要があります。地域固有の自然環境と歴史ある街並みを活かしつつ、後世に継承されるまちなみ文化の形成を目指し、継続的にシンポジウムを開催されることは、誠に時宜を得たものであると考えております。

国民の高度かつ多様な要請に応えつつ、質の高い建築ストックを形成するためには、的確に設計者が選定され、優良な建築物が建築されていくことが重要であります。くまもとアートポリス構想では、設計者の選定から事業の実施に至るまで、構想全体にわたって協力を得ることで、景観の形成に配慮した、地域の実情にあった、優良な建築物群を創造していくという、全国に先駆けた試みが繰り広げられております。国民のニーズ、自治体の施策、建築家の方々の創造力、そして土地のポテンシャル、これら全てが調和したまちづくりは何よりも重要であり、合意の果実となる街並みが次々と生み出されておりますことは、大変意義あることであります。

建設省としまして、国民一人ひとりが安全で真に豊かさと潤い、安らぎを実感できる社会の実現のために、一層の努力を傾注してまいります。その施策の一環として、先の通常国会におきまして建築基準法等を改正し、壁面の位置の制限、建築物の高さの最高限度等を定めた場合に道路幅員による容積率の制限、斜線制限を適用しないこととすることにより、住民の参画による地域の特性を活かした建築ルールの実現を図り、良好な街並み形成の誘導を図る「まちなみ誘導型地区計画」を創設いたしたところであります。

また、来年度に向けて、多様な市街地の特性に対応し、個性的・文化的でかつ調和の取れた、優れた街並み・建築景観を創出する街区形成を、多彩な建築家の方々の参画を求めつつ、国、地方公共団体の密接な連携のもとに進める「まちなみ・建築景観総合誘導パイロット事業」を重点施策に位置付け、優れた街並み建築景観を創出すると評価できるプロジェクトについて、その計画・設計の考え方

が着実に実現できるよう、総合設計制度、一団地の総合的設計制度などの建築規制の特例制度の弾力的運用を行うとともに、設計費、建築費等に係る補助や融資制度の充実を図るなどの措置を講じてまいることとしており、美しい街並み景観の形成や、個性あるまちづくりの支援に一層努めてまいり所存であります。

終わりに、くまもとアートポリス事業の益々の御発展と、当シンポジウムの御成功を心より祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。

平成7年8月25日、建設省住宅局長梅野捷一郎代読。どうも本日はおめでとうございます。

司 会 坂本様、ありがとうございました。

それでは、第2部のパネルディスカッションを行います。本日のシンポジウムの大きなテーマであります「建築がまちづくりに果たすべき役割」について、3人の講師の皆様にご議論をいただきます。

では、講師の皆様方のプロフィールをご紹介させていただきたいと思います。まず、先ほどご講演いただきました伊東豊雄さんです。

次に、デザインコンペの審査員をお務めいただきました建築家の坂本一成さんです。坂本さんは、くまもとアートポリス参加の熊本市営託麻団地をはじめ、コモシティ星田など数多くの住宅の設計を手掛けておられます。1990年の日本建築学会賞や、1992年の村野藤吾賞などを受賞していらっしゃいます。

次に、同じくコンペの審査員をお務めいただきました建築家の元倉眞琴さんです。元倉さんもアートポリス参加の、県営住宅龍蛇平団地をはじめ、ベルコリーヌ南大沢など多くの住宅を設計され、東京都建築士会住宅建築賞金賞や、龍蛇平団地では今年度の日本建築学会賞を受賞していらっしゃいます。

それでは伊東さん、よろしくお願いいたします。

伊東 豊 雄 それでは、引き続きまして約1時間20分弱ぐらいでしょうか、4時半ぐらいまで、まちづくりについてお話し合いをさせていただきたいと思っておりますけれども、私が先ほどお話をさせていただきましたので、坂本さんと元倉さん、それぞれおふたりに15分ぐらいずつアートポリスでやられたお仕事のコネプト等についてお話しさせていただきたいと思っております。

それでは坂本さんからよろしくお願いいたします。

坂 本 一 成 ご紹介いただきました坂本でございます。よろしくお願いいたします。

今日のシンポジウムでは、「建築がまちづくりに果たすべき役割」ということがテーマでございます。建築がまちづくりに関わるという意味では、その建物自体がその地域と直接な関係を持つ、これは最も重要な問題です。かつてまちづく



りに建築が関わるということは、いかにその街の景観を作っていくかと、極端に言えば、建築だけで、新しい街全体を作っていくかというようなことで、建築が街をつくるということだと思っていた時代がございましたが、今日ではかなりそれは様子が変わってきていると思います。つまり既存の街との関わりをどうするかということが、今我々に突きつけられている建築が街にかかわる当然の問題なわけです。このことに関してのことが、今日のシンポジウムでは中心的な話になるのではなかろうかというふうに思われますが、しかしその前にもう1点、あまり言われてないことですがお話しする必要があります。つまり建築がその街にできることによって、街全体のイメージといいますか、その街全体の在り方を変えていくということです。これがいい意味での非常に大きなことであろうと思います。

例えば、もう言うに及ばないことですが、八代で伊東さんが手掛けられた3つの建物、いや、4つでございますが、こうした建物がいつの間にか八代の街の建築を代表するということよりは、八代の街自体のひとつのイメージを作っているということです。これは、八代の街の新たなイメージを対外的に作っていくことになるんだと思うわけです。これは、建築がそのもの自体によってではなくて、ひとつの社会的な広がりの中で、街自体のイメージを作っていく。非常に重要なことであろうと思います。

このことは、あるいは後で話題になるかも知れませんが、とりあえずそのお話はちょっと置いておきまして、15分弱程度の時間をまだいただいておりますので、私自身の自己紹介を含めて、私が考えている建築と街と言いますか、あるいは建築自体の考え方を通して、建築のまちに対するあり方のひとつをお話しさせていただこうと思います。

私自身、長い間戸建ての住宅を設計しておりました。戸建ての住宅自体がまちづくりに直接関係ないとはとても言えませんが、やはり街との関係を一番考えるようになりましたのは、集合住宅と関わるようになってからでございます。先ほど御紹介いただきましたように、コモシティ星田という街は、戸建て住宅の集合でございますけれども、コンペティションが1988年にございまして、その時に入選させていただいたものが、92年でございまして、全体が竣工したものです。その後、くまもとアートポリスの託麻団地を長谷川逸子さん、松永安光さんと3人で設計させていただきました。

そのあと、もうひとつ今年の春竣工いたしましたペイタウン幕張というのがございますが、そこでパティオス4番街という集合住宅、これは民間の仕事でございます。ただ、千葉県の企業庁がプロモートして、かなり積極的に作っている大

きな街でございますけれども、その仕事に関わりました。この3つを紹介させていただいて、私の建築に対して、あるいはその地域に対して、都市に対しての考え方を話できればと思っております。

私、かつて集合住宅、それもかなり大きな団地の内に住んだことがございます。そこは大きな団地の端のほうでございまして、整然としたいい街で非常に落ち着いたところだったんですけれども、何か環境的に物足りない、というようなことを感じておりました。私の家族はもちろんそこにいるわけです。また、その回りのコミュニティを形成する方々とはお会いできるんだけれども、何かそこがひとつの、閉じたとは言わないながらも、まとまりが形成されていることへの苛立ちと言いますか、もっと外部的な広がり、街中のような所に住んでいたい。こんな思いをいたしました。これはそういう公的な広がりと言いますか、知らない人がそこへ通りかかるのを見ることができるような場所、窓の片側で外来の交通を見る、あるいは人が歩くのを見るというような場所のほうが、何か私にとって住む実感がございました。

そういう意味では団地の中央の、店舗などのある、どちらかと言えば落ち着いた場所ではないようなところが、住んでるという実感がします。こんなふうに思うことがありました。それはこんなことかも知れません。ある意味で集合住宅はいくつかの建物として物理的にまとまりを持たざるを得ません。そのためにできるひとつのまとまり、それはコミュニティとなって、意識しようとしまいとできてしまうひとつのまとまり。それがどこかで重いと言いますか、あるプレッシャーを与えるような気がいたします。

ですから、その後集合住宅を設計する時に、コミュニティを積極的に意識するというよりは、必ずできてしまうコミュニティ的環境をどうにか相対化したい。もっと社会的な、あるいは都市的な公共の場所と、もっと向かい合えるような場所にできないだろうかと考えてきました。そんなことで、後ほど紹介させていただくいくつかの計画は、外となるべく連続させたいと考えた結果です。ですから、外部からの道がそのまま建物の中を通過するような計画、あるいはそれがそれぞれの住戸の前面、いわゆるフロントリティと言いますか、個がコモンという共有場所を経ることなく、直接公共的な、どなたでも出入りできるような部分に接するような、そんな空間である計画をしてきました。そのことは、実はその建物が持っている地域性の問題と関わります。例えば団地とか集合住宅は外部から見るとそこで完結して、幾分入りにくい、違う世界がその地域に入り込んだというような感じがあるわけです。私も以前にそういう感じを持った、まだ集合住宅が少

ない時代に、新しくできた団地を見ますと、何か異邦な人たちが、異邦人がですね、オーバーに言えば、そこにある特殊な場所を作られて、どうもそこは他と違う特別な場所ができてしまったと、そんな思いをかつてしたこともございます。何かそういう特殊な場所にしたくない、その土地がその地域と連続した場所の中に、他の人も、今までそこにいなかった方が住まわれる、でもそれはその地域の連続であると。こんなふうな場所を作りたいと思ってきたわけです。

今お話ししてきたことをどのように建築的なあり方の中に位置付けていくかということが、私が今まで考えてきた集合住宅の基本的な考え方ではなかろうかと思っております。

それでは、時間もございませんので今お話しした3つの仕事を自己紹介的に見ていただきます。「こんな計画です」ということで、内容はまた後ほど議論にかかわってくればお話しすることとして、まずスライドを見ていただこうと思います。

これは先ほどお話ししましたコモンシティ星田という大阪の近郊の住宅団地の一部でございます。大阪府の住宅供給公社が事業化した、戸建ての住宅の集合です。112戸ですが、コモンシティ星田全体は1,000戸程度の住宅団地になる予定です。大阪府が開発した新しい住宅地でございます。私に関わった部分はここで、自然の傾斜をそのまま残したところに112戸の住戸を配置しております。このところが中央緑道ですが、外部がこの内部に進入できるような場所となっているわけです。そこから枝分かれをして全体の住戸を結んでいるわけです。

戸建ての住宅地ですと、いわゆる雛壇造成と呼ばれる傾斜地を吸収する方法によってひとつひとつの場所が個に分断されていくわけですが、このことを避けたい、つまりこの広がり全体をひとつの環境として、この回りとも連続するような形にできないだろうかということで作った団地と言えます。

これが中央緑道と呼んだ部分で、敷地全体を対角線に縦断しています。その間に集会所があります。この中を動線がいくつか絡まりながら通過していきます。

雛壇造成をしていないで傾斜地をそのまま活かしながら、見通しがきいた傾斜地に住宅が連続しているわけです。

こちらにこの団地の外側が見えていますが、このまま連続して外へ出てしまう。この等高線に沿った緑道が連続して建物をつないでいます。

建物と建物の間にスリットが開いて、長い視線の方向がとれますが、そこが同時に動線になっているわけです。それが主な動線をつないでいるような場所と結ばれます。





これは住戸の中の駐車場なんです。車が入っていないからわかりにくいのですが。この奥は住戸の庭になってます。向こう側は道路の延長の緑道が走っています。建物を透過して、手前の公的な道から向こうの公的な道にそのまま連続してしまう。これは住戸の庭ですが、この部分では駐車場でこっちは道路と、どこまでが公的な部分なのか、どこがプライベートなのか視覚的にはわかりにくい設計となっております。もちろん所有権の問題がありますから、それは厳密に明確な位置付けはしてあるわけですがそれでも。



これなんかもそうですね。ひとつの住戸の中庭を通して向こう側の道路まで見えてくる。それは同時に、街の中に、つまり住宅の中に住んでいるばかりでなく、先ほどお話ししましたように、そういう街の中に住んでいる。つまり公的な部分に接して住んでいるという場所としてここを作りたかったんだということです。例えばここですと、この窓を通して、向こう側の家並みと同時にここを通る人が見えるというような、かなり外部との接触性が強い作り方になっています。プライバシーの問題を含めて、いろんな心配をしておりましたが、その辺に対しては大体問題なかったようです。最初はここまで開いて、直接接触させることが果たしてどうなのかと、心配がなかったわけではありませんが、住んでいらっしゃる方の大方は楽しんでいただいているようです。



これが長谷川さん、松永さんとアートポリスで関わらせていただいた熊本市営託麻団地です。ここでは、4 ha の建て替えて、既存を含めて420戸程度の住宅団地になったわけですが、この設計に際して、ご依頼いただいた市のほうから、できるだけ開放的な、この地域に溶け込むようなものにしてほしいとの希望がありました。これは私たちが考えていたことと一致しており、こういう計画を作れたわけです。

ここでも中央緑道が団地を縦断するわけですが、これにはかつてこの団地の中にあった市道を使っております。かつてここには1層ないし2層の木造の住宅が並んでたわけですが、その記憶といいますか、時間的な過去を残しながら、それに連続させながら、3期に分けて作られました。この辺が1期ですね。ここからこの辺が2期になります。ここが3期です。自然の街に近付けようということもあって、1期ごとに3人の設計者が担当するのではなくて、1期ごとにそれぞれ3人が同時に関わる。ですから例えば、この1期の部分ですと、ここが長谷川逸子さん、ここが松永安光さん、ここが私に関わった所です。2期目は、ここが松永さん、ここが長谷川さん、それからここが私ですね。

同時にここには既存の、4層の住棟が残るわけですから、ある意味では3者の

設計したものと言うよりは、4者が関わったものですね。この既存のものを残して、3期目でここに長谷川さん、松永さん、私という形で設計しました。

最初、1期ができた時には、3者の全く違ったタイプの建物ができたわけですから、違和感のある不思議な感じがあったようですが、これを3期にわたって繰り返していき、それを中央緑道で結ぶことによって、逆に変化のある街並みとなったと思います。

同時に、この回りに対して非常に開放的なものを作ろうとしました。

例えば、この中央緑道が枝分かれしたものが全部外へそのまま出ていく。例えば私が関わった部分は、この中を縦断する通路がついてます。中に入りますと、そのまま外部に出て、団地の外へも出て行きます。ですから、ここに入ると、外周道路を通る車が見えたり、様々なアクティビティって言ったらいいいでしょうか、人々の動きがそのまま連続していく。ここへ入って来られた方が、この団地内の建物に行くのではなく、通過してそのまま外に出ていかれたのを私も何度か見たことがあります。こんな風に、先ほど伊東さんのお話にもありましたが、何か公園的な、この地域の公園的な場所の中に市営住宅を設定できないかというイメージがございました。

ですからどこからでも入れるような公園の中に人々が住む。そのことによって、そこに住まれる方がパブリックな部分と直接面することで、我々の現代的な居住の在り方みたいなもの、先ほど伊東さんが目的地ではなくて通過点と言っていました。私たちの生活する場所は、都市の中に住むというのは、どうもそういうことではないか。もちろんこれは熊本の市内ですけれども、かつての団地的なあり方ではありますけれども、どこかで都市的な位置付けをしたいと、こんな風に思っています。

私の所は、今お話しした縦断通路という風に言っております、建物を縦断する、長手方向にこういう通路が走ってますね。ここにプランが出ております。これは1階ですが、この上にコの字形のものが乗ってます。この通路の部分の感じを見てください。

集会室がここに入っております。

このようにこの通路は、自転車置場等を通して外へ連続しているということですね。この階段を上がっていくと、各住戸の入口がございます。時間は？

どうぞお続け下さい。

そうですか。この集会所の内部なんです。開放的で、これも団地の中央に面しているだけではなくて、外部にも直接面しているのです。



伊 東 豊 雄
坂 本 一 成

これが外側の周りの地域との関係です。どうしてもこういう4層とか5層が建つものですから、この地域との関係が難しいと私たちは思ったんですが、こんな状態の中で、これを通して街ができていくということをお話したかったんです。



これが最後になりますが、幕張の集合住宅です。これは大体70m×80mの敷地の中に、1階に商業施設、駐車場などの都市施設が入って、2階以上が住宅になっています。これがメイン道路の方に向いた部分で、こちらの写真がこのちょうど裏側になりますね。ここでも星田、託麻と同じように、いかに外に対して開かれるか、街に対して連続させるかということがテーマになっているとも言えます。

今写真で見ていただいた部分はこの部分なんですけれども、3層構成です。1階にいわゆる下駄履きの、店舗、この場合銀行なんかですけれども、この辺に店舗が入っています。そして、こちら側のほうがコミュニティ関係の施設があるわけです。これは街路型といって、回りの道に対して外周は全部住宅が包んでいます。それに囲まれた部分、2階の部分になりますが、そこが人工デッキですね、ここに庭園を作っています。それぞれの住棟は分棟化して分かれています。それで外部へそのまま空間的に入り込んでいく。あるいはこういう所にピロティがたくさんあります。そこに入ってきて、それが中に入っていく。この部分は全部、外部から自由に入ることができるわけですね。ですから、住棟をまたいでパブリックな部分は連続しているわけです。



これが1階のプランです。ここは中央の部分、ここに駐車場があるんです。これを突っ切って外へ出てしまうわけですが、この部分の上が人工庭園になっているわけですね。この回りの部分に住戸が並んでいる、隙間を持った形で並んでいるということです。

今、たくさんピロティがあって中に入り込めますよというお話ししたのはこういう所ですね。他は店舗になっています。

これが一番中心の部分のコート、2階に見えておりますのが屋上庭園です。この部分は外部から、道路から連続した部分のコートです。ですからここまで入り込めますね、この上にある住棟、例えばこの住棟のちょうど裏側が出て、住棟の道路側でない方向も、ある意味でパブリックに面することになっています。

これは冬の時ですので、まだ植えたばかりの状態ですから、植栽の状態があまりよくありません。2階のデッキの部分と外部から入り込んできたコートがこういう形で、空間が内部に入り込んで上へ上がっていく。こんな風な空気の動きと言ったらいいんでしょうか、必ずしも視覚的なものとは限りませんし、人間が行



けるということではありませんけれども、空間的に連続性を作っていると。そういうことで建物が公的な場に対してのフロンタリティを持ってるということだと思います。

これがさっきお話ししたメインのコートですね。これが夜景になります。これが銀行、庭園の部分ですね。スリットが開いてるのがおわかりになると思います。



今のようなスリットから、例えばこういうところから向こう側に、隣の建物なんかもこの中に視覚的に入ってくるということですね。ここも先ほどお話ししたコートの1部です。

この断面でおわかりになると思いますが、外から入ってくる部分はこういうところですね。

これもそのコートの部分になります。こちらは道路側ではなくて内側ですね。これも同じですね。

そんなところでしょうか。すいません、ちょっと時間がオーバーしちゃいました、申し訳ございませんでした。とりあえずそんなところです。

伊東 豊雄
元 倉 眞琴

どうもありがとうございました。それでは続きまして元倉さんお願いします。

手短に、ちょっと挽回したいと思いますから。また後ですぐスライドを映していただきますけれども、とりあえず簡単に整理してしまいますと、私が今考えていること、ないしはこれからスライドで御紹介する、皆さん御存知の方も大勢いらっしゃるかも知れませんが、アートポリスの仕事としてやらせていただいた龍蛇平団地、大きく言うとふたつぐらいの主題を持ってやりました。そのひとつは、集合住宅と我々が口にしますけれども、集合住宅というのは何なんだろうなど。それから、例えば集合住宅って言う時に僕らがすぐイメージする、四角い箱のような、窓が並んでるような、ないしは廊下が重なってるような、そういう建物というのをすぐイメージします。ないしは民間の建物だとマンションみたいなものをイメージしますが、実は誰がそういう建物の形式っていうのを作ったんだ、というふうに素朴に疑問に感じます。



つまり、そういう形式、先ほど伊東さんが非常に固定化された形式の話をされて、それを破るにはどうしようか、プログラムの問題だっていうふうな話がありましたけれども、私もそういう形式っていうものをどうしたらもっといい状態のものにできないかな、という風に考えます。

集合住宅というのは文字どおり住宅が集まってるものだろうと。まず、非常にあっけらかんとした当たり前のところから、人が住む、集まって住む環境っていうのをもう一度考えてみたらどうかというふうなことをまとめた形で、アート

ポリスで提案をさせていただいたわけです。

それからもうひとつは、これももしかしたら伊東さんの話ともリンクしてくると思うんですけども、建築というものが我々ともうちょっと直接的な関係っていうのを持てないだろうかと考えています。私は東京の下町に育ったんですが、ないしは東アジアのどこかの国や、もうちょっとプリミティブな人たちの集落でもいいわけですが、もっと人と建築というものが直接的に結び付いていた。僕の下町の子供の時の体験から言うと、街の中に人の生活、人が働いてること、それから人が遊んでること、そういうものが全部住宅とその周辺と道、そういうものの中に全部展開されていた。そういう風景は、これは今でも日本の中でも目にすることはできるわけですが、だんだん我々が豊かになって、物がきれいになって、建物が固くなっていくプロセスの中で、建築とか都市とか道とか、そういうものと我々とが直接的な関係を持たなくなってきている。

そういうものというのは、やはり何かおかしいだろうし、言葉は変ですが、一種の疎外の状態、疎外の方向に行ってるんだろーと思います。やはりもう一回私たちが、そういう建築と我々の生活というものがもっとダイレクトな関係を持てないだろうかと。それには、あとでシンポジウムで話が出ると思うんですが、もともと形式的に決まったものを一度疑ってみる必要がある。そんなことが、私が今、主に考えていること、それから龍蛇平団地の中で、その一部をやってみようと思いたことです。

大体今日の説明もそんなところをスライドとして非常にダイジェストに持ってきたものです。じゃあ、スライドをお願いします。



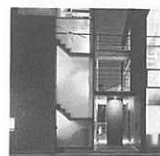
左はもう壊されかかっているのかな、壊されてしまったかも知れませんが、香港の九龍城砦と言っていた、ちょっとスラム化した立体の集合住宅ですね。この絵を面白いと思うかひどいと思うか、汚いと思うかきれいと思うか、人それぞれ違うと思いますが、私はどうも街というのは、ないし我々がやってることっていうのは、どうもこんなようなことなんだろうと。基本的に1軒1軒の家がきちんと見えるわけですね。そのものが単に集まっている。それから効率を良くするために縦に積まれている。とりあえずはこういうものが集合住宅って言うてもいいし、都市と言ってもいいんだらうと。ただこれには集まってくる時の何かプラスになってくるものというものが全く入っていない。その部分をとりあえずは頭の中でチェックをしておいて、ただこんなような人がたくさん集まってる状態ってものを我々は考えていくべきだと思います。

右側のはもうなくなっちゃいましたが、女流の彫刻家のニーベルスンという女

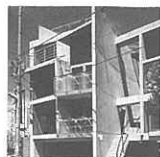


性の彫刻家のオブジェです。拾ってきた木切れを、いろんな箱を作ってその中に入れていって、それを重ねていって全体を真っ黒い色で塗ってしまったものなんです。左の絵と右の絵は僕にとっては同じような意味合いなんです。ひとつひとつのものが少しずつ変化を持って集まってくる一種のテクスチャーというのは、どうも人が住んでる環境にとって、割と心地いいというものではないかというふうに僕は考えています。

先ほど集合住宅というのは住宅が集まっているという風に言いましたけれども、これは東京の荻窪の前面道路、3mぐらいの狭いところに建っている極小値の(八代ではこんなことやんなくてもいいと思いますが)住宅です。これは住宅といえは住宅なんですが、実はこれを集合住宅だっというふうに言ってしまうと、集合住宅に必要なもののほとんど全てのものがこの中に入っています。つまり両側面は家ですから、前面に対してだけ開放されている。この場合は上も開放されています。それから、物干し、バルコニーに代わるものが出ていて、庇が出ています。つまりこれは、このまま横にどんどん並べていけば、一種の集合住宅を作ることができるものなんです。ですから、これは1軒の住宅ですが、もう既にこの中には、我々が集まって住むという時に考えられる要素っていうのが相当量入ってる。それを我々は都市住宅というふうに呼んでるんだらうというふうに僕は思っています。



左側は2世帯住宅、ちょうど真ん中の階段のところ、ある照明デザイナーの家とその親の家なんですが、この時はもう既に都市というものを意識してて、あの隙間というものが建物の形以上に、何かものをサインとして表現しようとしています。そこにこの住宅が、住んでる人のある種の表情っていうものを代弁しています。それから階段室がああいうふうにライティングされていますので、外に対してちょっと大きな照明器具っていうような格好にもなっています。2世帯ですから、もう既に集合状態に入っています。



それから右のは、これ実は上から2層がメゾネットの、左と右にありますけども、大きさは違いますが、下がピロティですので、これは4世帯のいわゆるアパートです。真ん中の割れた所から各住戸に入っていきますが、もう既にあの壁を斜めにしたこと、それからあの隙間を取ったこと、そこに階段があること。結局、4戸集まることによって、左側のスリットよりも少し大きな空間というものを、都市の中に切り込むことができたわけです。それによって、こういう建物が1棟の形というよりも、そういう開きの空間、そのものがその都市に対して意味を持ってくるというようなものです。

これは10戸ぐらいになったんですが、左がモデルで上から見てるところですが、実はアクリルで作ってあるところが部屋が埋まっているところで、白く作ってあるところが中庭と階段の部分を示しています。右側がその中庭の写真ですが、10戸集まることによって、自分たち独自の空間を持つことができます。つまり10戸集まることによって、自分たちだけの、ある都市性というものを作ることができます。いろんな意味合いを込めて言いますが、今日の主題の説明の仕方だと、たくさん集まってくることによって、違う質の空間というものを獲得していける例だと捉えてください。



これはちょっと暗めのスライドですが、実は我々はここから向こう側を実は設計して、これは19戸ぐらい設計したんですが、手前の部分っていうのは、30年以上前にもう作られた3階建てのアパートです。なかなかプロポーションのいい空間を持っていたので、内部と外部をリニューアルをして、こういうふうにコの字になっているのが既存の部分なんですが、それに対して我々は少し増築をして、完全に広場を囲い込むという格好で設計したもので、全部合わせるとこれは、こっちのユニットは小さいですから50戸ぐらいになると思いますが、細長い共有の空間を持つことができます。

実はもとの場所も、ちょっとわかりにくいですが、ピロティで外の道と接しています。今度我々が増築したところも実はピロティで接していて、この広場はかなり道に近い状態のものになってきました。このつぎに我々はここに小さなグローサリーを作ろうというふうに計画しています。この中庭はもう既に道の一部と化する方向に向かっています。

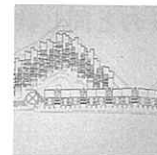
今、1戸の住宅から50戸ぐらいまで順番にいったんきましたのは、実は1戸の住宅と50戸の住宅というのは、基本的に住宅が集まっている状態としては変わらないんだ。ただ、たくさん集まることによって、我々は住宅以外の質のものを獲得することができる。それは先ほど坂本先生のスライドにもたくさん出てきていると思いますが、必ずしもスケールの大きいものを持つておくだけではなくて、集まることによって、単に住まいじゃない空間というものも作ること、持つことができる。つまりそれが集合住宅を作る最大のとは言いませんが、ひとつのメリット、意味だろうという風に考えています。



これは龍蛇平団地ですが、左側が地図を写したのものですけれども、建替え前の建物が薄いけれど見えます。この敷地の形が、昨日一緒に行った方には説明しましたが、三角形がふたつ組み合わさっている状態です。そこに道路が通っていて、他にほとんど道路と接してない。その敷地の広さの割には相当長い辺を道路に接

している。この道路を新しくきれいにしていくことと、この団地を作ることと一緒に考えていこうというのが最初に私が考えたことでした。

それからもうひとつ、もともとこの団地には木造の平屋の住宅がありました。普通の我々の街と同じように、道があって庭があって住宅がある。庭ごしに各人の家が何かちらちら見えてくると。つまり、そこでは環境と建築と我々の直接的な関係というのが持てたわけですが、そういうものを新たに効率良く立体化する中で作っていけないかというのがもうひとつの主題です。



左側のダイアグラムでいきますと、真ん中に中庭を取って、細長いタイプの住棟と、ギザギザと段状に積み重なった住棟のふたつのタイプでもって、この敷地形態をうまく利用しながら納めていこうとしたものです。手前の住棟は細長い形ですが、1階がやはりピロティになっています。そのピロティというのは、その道路に対してのアーケードの意味合いと、それから団地側から見ますと、それは中庭に対する底的な、縁側的な空間です。それから、外側の道を歩いている人にとって、この団地ってのはどういう風になってるんだろうか、ないしは、どんなふうに皆が住んでるのかなということが意識できるようにしてあります。それから、中の団地に住んでる人にとって、自分たちの団地が閉じ込められてるのではなくて、周りの街がどうなって、どういう人がここを通ったりなんかしてるのが見えるように、わかるように、そんな関係になってます。そういう装置としてこのピロティが機能しています。

それからこちらのほうのタイプでは、真ん中に階段と廊下があって、それを渡っていきながら、それはひとつの路地として考えられていますが、その路地から直接各家のテラスに入ることができます。ちょうど我々が普通の街で、道があって庭があって自分の家があるという関係を、この路地で作ろうというふうにしたものです。

右側が道路側から見たところです。左側はちょっとそれを俯瞰したところです。右側はピロティから外の街のほうを見えています。ピロティの下は自転車置場と階段の一部がはみ出してきている以外は何もありません。

右側の写真が、道を歩いて行って団地のほうを振り向くと、団地の中庭の状態が見えます。ですから、何かそこで子供が遊んだりする状態が、普通に日常的に道を歩いているところでわかるわけです。

これは左側がそれをもうちょっと接近した写真です。右側が逆に中庭から外の街を見た状態です。

団地の中庭はこんな環境です。



ああいうふうにしつづらすことによって、奥行き広いテラスを取ろうとしたものです。

これがテラスと、真ん中の階段、廊下とテラスのあたりですね。左がちょうどその隙間の部分です。



これはユニットの中の写真ですが、これは今日見学してもらえなかったんですけども、左の子供のいる写真のように、テラスがあって、手前側にコンクリートの土間があって、それからゴザが敷いてありますけれども、部屋に行くというふうに、普通の家にはやはり庭があって縁側があって部屋があるというのと同じ状態を作り出そうとしたものです。

大体こんな感じで子供を真ん中で遊ばせて使ったりしています。

以上、駆け足ですが、先ほど言った私の主題を、ある程度表現できたというふうに思っています。どうも。

伊東 豊雄

どうもありがとうございました。おふたりとも集合住宅のプロジェクトでアートポリスと関わられたので、もう少し集合住宅の話から続けさせていただきたいと思うんですが、今回、この隣の博物館で、アートポリスのプロジェクトが全て紹介されておりますが、その中でかなりな部分が県営住宅、市営住宅等の集合住宅のプロジェクトです。集合住宅にこれだけいろいろなタイプが提案されたということがアートポリスのプロジェクトの中で、かなり重要な位置を占めているのではないだろうかと思います。戦後の日本で、やや大袈裟な言い方になるかも知れませんが、これほど集合住宅の問題が問われたことはなかったんじゃないだろうかなんとも言っても良いかと思えます。

つまり、我々のような個人の住宅を長く作って来た者にとっては、集合住宅に携わるということはほとんど考えられないことであつたわけですね。坂本さんや元倉さんはもともとかなり住宅を得意にされてきた建築家であつたわけですが、それほど集合住宅をこなしてきたほうではない。集合住宅を作られる方たちには、プロフェッショナルな建築家の方がおられて、そこでかなり定型なものが作られ続けてきた。それに対して、今までむしろ個人の住宅を作つてこられた方達が、新しい集合住宅をいろいろな形で提案されたのがアートポリスであると思うのです。

いろんな問題が提起されていると思うんですが、今のおふたりのお話の中に共通して1戸の住戸を連続させていく、その連結の仕方といいますか、それが都市に向かって開いていく。その関係に共通した部分と、かなり対立のように見受けられる部分とがあつたような気がいたします。坂本さんの場合は、従来の

ようなコミュニティという概念をなくしたいんだと。これは私なりに解釈いたしますと、現代の住民、都市に住んでいる人たちは、隣同士に住んでいてもお互いに関係がない。これは大都市に行けば行くほど、特にマンションと呼ばれるような、あるいはワンルームマンションと呼ばれるような集合住宅に住んでいる人たちは、ほとんど隣に誰が住んでいるかさえない。むしろ顔を合わせないようにして暮らしているという現実があると思います。

それからまた、かつてのように何かひとつの団地の人がそこで集会を開くとかですね、ある近隣関係を保っているのではなくて、1個の家族が直接都市という大きな空間の中に飲み込まれていく。その間にコミュニティとか地域という関係がなくなっているのが大都市の現実である。その時に一体、そういった近隣的なコミュニティの空間を作るべきなのか、それとも、むしろ排除していったほうが現代的な、快適な生活が求められるのかという、そこが集合住宅を作る時にかなり大きな分かれ道になるだろうと思われまふ。

坂本さんの場合には、今お見受けしておりますと、そういった近隣、従来の形での近隣的なコミュニティは排除していこうとされているのではないのでしょうか。いきなり1戸の住戸から都市という空間に開いていったほうが快適な空間が得られるんじゃないか、という提案のように見受けられたわけです。そのあたりが元倉さんの場合には、もう少し何かヒエラルキーを持っていたほうがいいんじゃないかという提案をされているように見受けられました。つまり、龍蛇平団地の場合でも、ある広場という空間があって、それから階段からテラスへ行って、エントランス、玄関があって、縁側があってという、従来型とは言えないかも知れませんが、ある順序を辿つて住居の中に辿り着いて行くような、そういうオーダーを持った空間を積極的に提案しようとしてされています。その辺りをもう少しおふたりからお伺いしてみたいという気がいたしますが、坂本さんからいかがでしょうか。

坂本 一成

はい。先ほどの伊東さんのお話ともかなり関わってくるのではないかなと思うんですが、住宅というのは一番肝心の、ひとつの中心としてまとめた空間である。これは歴史的にずっとそうだったわけですが、今だってある意味でその通りだろうと思います。ただ、そこにこだわっていることが必ずしも快適かどうかということ、それを疑わざるを得ない状態になってきているというのが先ほど自分の経験を含めてお話ししたことだろうと思うんです。

幾分繰り返になりますが、団地であつたり集合住宅であるということ自体がもはやひとつのまとまりを持つんだということを認識する必要があるということ

です。そういう前提に立たないと、ひとつのまとまりが必要ではないかという議論が出てしまうような気がするんです。もはやまとまりはあるんですね。ある意味ではそれでも十分ではないかと。もちろん私はコミュニティのようなそのまとまりを否定して、全部戸建てにしたほうがいいということを言っているわけではなくて、そういう前提の中にあった時に、より快適な状態、居住空間になるのではないかということです。我々が現代を生きているというのは、もちろん近所の方々との付き合いもありましょう。しかし、それを含みながらさらに越えていくこと、我々の新たな現代の生活像、我々の認識、あるいは現代を生きるためには、もはやあるコミュニティ概念を一度相対化して、位置付けてみる必要がある。そして、そのためのひとつの計画として、直接回りの街と接触する必要があるのだということです。

その時に、いっぺんに都市という大きな問題となるとは必ずしも限らないわけですね。団地をその周辺と連続させるということは、その団地自体でまとまり過ぎないでほしいということを意味します。ですから、その周辺と連続するということは、例えばそこに人が自由に入ってこられるような、あるいは公園的な場所であってほしいということです。かつて公営住宅がある地域のまとまりとして、あまりにもまとまり過ぎていたような気がします。外部の人がそこを迂回するような、集合住宅団地がそういう場所になってほしくない、もっともっと連続した街の中に連続して住むことのほうが、私は重要な意味があることではないかと、こういうふうな認識を持っているわけですが、今、伊東さんがまとめていただいたことでよろしいと思いますけれども。

伊東 豊雄
元倉 眞琴

元倉さんはいかがでしょうか？

今日の話がちょっと時間が短かったので、かなり誤解される部分があると思います。例えば僕が下町でって言った時に、コミュニティってことがひゅっと出てくるかも知れないんだけど、僕は口が裂けてもコミュニティって言葉を使わない、つまり実態が僕もちょっとわからないんで使わないようにしようと思っているんです。それで、確かに空間のヒエラルキーっていうのはあの中ではあります。そこでもって皆の何かひとつの意思みたいなものが統一されて、何かができるとは全く思っていないんです。

もちろんあの中庭そのものはとりあえず任意的に作られた単位ですが、ひとつの単位として自分たちがあるということを意識付けようとしていますけれども、それによって、かつて我々が持ってたような地縁的なコミュニティというものができるとは思いません。

僕が獲得しようとしていたことは、一番最初冒頭に申し上げたように、建築と我々の直接性。つまり別の言い方からすると、都市というのは基本的には住まい、人がたくさん住んでいる状態というのが僕にとっては都市だろうと思っています。つまりそれだけで全部は成り立たないわけで、もちろんいろんな施設も入ってくるわけですが、結局いろんな人が集まっている状態が都市であるから、その状態を我々が直接何か体験するようなものを、やっぱり都市として作ろうと考えています。実はあの中庭というのは、私が考えたある都市の、ひとつの細胞みたいなモデルであって、実はあそこでまとまったあるコミュニティを作ろうとしたんじゃない、ある都市的な環境というものをもう一度作ろうという風にしたものなんです。

それで、昨日見に行った伊東さんの養護老人ホームですが、あれがやっぱり川のほうに向かって各家が並んでいます。僕はああいう風景って非常に好きなんです。今度の龍蛇平の中でも、その街に接して、つまり道路に接してその家設けるタイプを提案しましたが、実はそういうタイプはよくありそうで、あまりないんですね。結局、都市に接して住宅がずっと建っている状態ってものを、ひとつは提案していこうとしたものなんです。うまく答えになってるかわかりません。

それからもうひとつは、直接性と言った時、先ほどの伊東さんの消防署の話がすごく興味深かったんです。建築を我々がいい状態と考えるような、都市との関係を持ったものとして考えようとした場合、例えば、消防署が我々に直接関係あるような状態に、その建築としてありたいと思った時に、常にそこではストレスの問題っていうのが必ず出てくるだろうと思います。僕は住宅において、何かを考えるひとつのキーとしてストレスっていうことがあるんだろうと思う。僕らは今までそのストレスっていうものをどんどん回避する方向でものが進んできたんだろうと思うんですね。それは、先ほど伊東さんが消防署を一般の人にも入れるようにしてしまった瞬間、その管理の問題と言うか、消防署の問題に関しては、実はそこにストレスが生じてきて、それを調整するところで何かが発生しているはずだと思うんです。調整することによって、お互いの何か意思の疎通みたいなものが、消防署の人と見に来た人って言うか、遊びに来た人の関係っていうのが生まれてくる。

その住宅というの、実はそういう調整ということがあって初めて住むということが発生していったんだと思うんです。その調整しないで住むような状態に僕らがどんどんどんどん作ってしまった。それをもう一回、何かお互いに調整しながら住むような状態というのを、その昔に戻るんじゃない、新たに作れないか

なというふうに思っています。それはやはり、住宅が直接街なりに出てくことだと思っんですね。何かまとめているんなこと喋っちゃいましたけども、決して僕はコミュニティ論者ではないし、全くそういうものを信じてやっているわけじゃなくて、逆にコミュニティを考えたからって言って集合住宅ができるとは絶対思っていないんです。ただ、コミュニティってものがあるかも知れないですね。つまり、我々の問題外の事柄にしてしまったほうが僕はいいと思う。ないとも言わないし、別にあったっていいと思う。それはあるかも知れないぐらいのことに思っていけばいいと思います。

伊東 豊雄 今の元倉さんのお話は、龍蛇平団地の計画にお話通りに表現されているような感じがしました。昨日私も初めて拝見しまして、街区空間を歩いていると、とても楽しい感じがします。それはおそらく、広場とさっきダイヤグラムで書かれていたけれども、あの前面道路側がピロティになっていることが非常に効いているというか、大きいんじゃないかと思ったんですね。あそこがピロティになっていることで、広場と呼ばれる空間を歩いても、息が詰まるような感じがしないし、それからまた奥のほうに住んでいる方たちも、1階がピロティで抜けていることによって、かなり心理的に開放されているという印象を持つことができているような気がしたのです。そういう何か半開きというような空間が非常にうまく作られていると思って感心していたわけです。

今、ストレスというお話が出まして、これが我々が計画をしようとする時に大変な問題だと思うのです。消防署の場合もたまたま使ってくださっている方たちが、ああいう作り方を受け入れてくださった。ですから、我々が予想していたよりも、はるかに一般の人たちが奥までずかずか入って行っても、隊員の人達は平気で「こんにちは」と言ってくれる。

若い隊員の方たちがあそこでトレーニングをやっていると、いつも見てくれる人がいるので緊張感があって張合いがある。しかし、一方で食事をしているところまで一般の人が入って来られるので、気を抜く暇がない、リラックスできないと、そういう緊張を強いられる。つまりストレスを強いられる。

団地の場合でも、閉じられれば閉じられるほど、外の人からはシャットされるけれども、一方で外部の人との関係が失われていく、それをどのあたりに定めるか。もう少し問題を広げていくと、それは集合住宅の問題だけでなく、あらゆる公共建築にも、あるいは個人住宅にも同じことが言えるような気がするわけです。つまり、建築は、常に生活の一番コンサーバティブな、過去を持続しようとする性格を受け持っているような気がするんですね。例えば住宅でも、家族という形

態がかなり昔とは変わってきている。変われば変わるほど、むしろ住宅は従来の家族の形態を守るような形であり続けるという性格を持っているし、公共建築も、実際の使われ方が変われば変わるほど、逆に壁を築いて従来のタイプを守ろうとするような傾向が往々にしてある。

一方でそれに対して、もっと現代の生活に相応しい、それに追随するような作り方をしていきたいと思いつつ、それをとことんやろうとすると、一方で非常にストレスを生じてくるという矛盾があると思うんですが、そのあたりをそれぞれにどんなふうにお考えになっておられるか。これは特に集合住宅をやられた時には住戸の問題、住戸をどう作っていくかっていう問題とかなり絡んでくると思うんで、その辺を含めてお話いただければと思うんですが。

坂本 一成 住宅というのは、コンサーバティブなといいますか、なかなか変わりにくい空間だと思うんです。集合住宅では尚更なわけですから、新たなことを、例えば開放、より開放的なあり方にするというのはやはりなかなか大変なことです。先ほども星田の例でお話ししました。建築学会での、研究者の中でこの開放性のことを気にされる方がいらして、ヒアリング調査などから検討した結果を学会の今回の大会で報告されておりますが、この結果は私大体予測した通りの結果でありました。

それはどういうことかと言いますと、やはりなかなか新たなところに踏み込むことができないということではないのですが、ただ、例えば、私たちが喫茶店という場所、今日の都会の喫茶店の店の部分は、外部へ向かっていったり、あるいはガラス張りの中で、内部がよく見えるような状態でお茶を飲む場所として設定されている。今から10年以上前、あるいはもうちょっと前かも知れませんが、そういう喫茶店ってそんなにはなかった。ほとんどなかった。私もまだそういうところへ入るのは幾分恥ずかしい感じはありますけれども、でも、私よりちょっと若い方だったらもう全く問題なくて、当たり前な空間になっているんだろうと思います。

あるいはまた、最も落ち着く場所というのは、例えば静かにひとりになれる空間ではなく、電車の中であったり、いわゆる大勢の他人の目の中に入ることが最も落ち着くという言葉はかなり以前から多くの方が言っております。確かにそういう感性の変化はいろいろあると思います。

そういうちょっとしたことが思い次第と言いますか、慣れ次第と言いますか、空間の中の私たちはどんどん変わっていく。見られることが、ある場合にはストレスになるでしょうが、ある場合にはストレスにはならないで、そのほうが快適になると。これは変な意味で言ってるわけではなくて、現代人にとってはよ

り開いた場所のほうが快適であるということがあるということだと思うんです。

ある共同体というのは、ある種の相互扶助的な安心感をもたらしてくれることがある一方で、かなり逆のストレスを作るんだという考え方だってできるわけですね。どちらかと言えば私はそちらのほうに力点を置いていると。つまり、そういうあるまとまりの中に完結したところのほうが、ストレスがあるのではないかと。そういうところにもう我々の現代は来ている。

そんなことが今喫茶店の例でもお話ししました。集合住宅でも、私自身が経験した中で割合強く感じております。ですからやり方次第でそのストレスの問題は変わっていくのではないかというふうに思います。

伊東 豊雄 坂本さんの場合にですね、託麻でさっきスライドでも御紹介いただいたんですが、一部の個室をメインの空間から通路で離して、小さな中庭のような空間を作っておられます。それがずっと連続していくので、その下を歩いていると、今までの集合住宅には全くなかった面白い体験ができるのです。我々も住宅街を散歩なんかしていると、それぞれの家はどんな暮らしをしているんだろうというような生活の気配が次々に感じられて想像しながら歩いていくと楽しいんだけど、集合住宅の場合、そういう空間がなくて、全部一挙に見下ろされてるような通路しかないわけですね。

そういう意味で坂本さんは、集合住宅でありながら、ああいって非常にプライベートな性格を持った公共の通路って言うかな、あの空間は僕は大変成功したんじゃないかと思ってるんですが、一方でそれは、住戸のプランというようなことからどんなふうな主張になるわけですか。

坂本 一成 あそこは、住棟の中の縦断通路と言った所ですが、もちろん外部の人がそこに自由に入って来ということへの不安がないとは言えないと。事実、窓の開け方をはじめ、模型を何度も何度も作り直して、かなりいろんな検討をしたわけですね。集合住宅は公共的な場所に直接向かいにくい。するとひとつの住棟であるというような形での全体性の中で、吸収されると言いますか、ヒエラルキーができてしまう。そのヒエラルキーがない状態にするための結果がああいうやり方であり、あの場所だと思う。私はそれなりにできたと思ってはいるんですけど。

同時にその縦断道路を渡るような形で2階以上の住戸を置くことによって、住戸の中での長さ、広がりというより、広さは変わりませんから、実際には長さを取るによって、ある種の広がりであったり開放感を取れるようなことも重ねていますね。

それから、今伊東さんがおっしゃったように、ある部分に限定してそこに対応

させています。住戸全体をあそこに全面的に開いているわけではないですね。長さを取ることによって、ある部分を直接開くような対応をさせている。このことは重要なことですね。

伊東 豊雄 元倉さんはいかがでしょうか。

元倉 眞琴 伊東さんばかり質問してずるいので、逆に伊東さんに質問しようと思っていますけども。実は集合住宅と公共施設の接点あたりに、昨日見せていただいた老人ホームっていうのがあるんだろうと思うんですね。つまり、あれを集合住宅とは言いませんけれども。それから各人の、ふたりの部屋もありますけど、個室があって、それから共用の施設もあって、たくさんの人が住んでいます。それが伊東さんの建物だと、各個室というのは街に対して直接接していて、実は外側から見えてしまう。それは彼らにとって嫌かも知れないけれども、逆に前の温泉の旅館なり普通の建物を見て、夜になると多分電灯が点くんだろうと思いますけども、「あ、自分が街の中にいるな」という状態も多分感じることができると思うし、そこに人が歩いている状態を見ること自体は、多分自分の生活の中に取り込んでいけるものだと思うんですね。

それから、これから高齢化社会という風によく言われますけれども、多分何かが人とお互いに助け合って住まなくてはいけない部分っていうのが出てくるだろう。それは、ああいいうお風呂のように、施設を共有し合ったり、御飯を皆で食べるシステムを作ったり、そういうような多分いろんな住まい方がこれから出てくるだろうと。それから、伊東さんは老人ホームっていう制度そのものを建築したわけじゃないですから、そういう住まいというものを確実に考えてるだろうと思うんです。その辺を逆に伊東さんに、住まいという観点からああいいうものを考えましたかというような質問をしたいと思います。

伊東 豊雄 私は割合ドライにその辺を考えているわけですが、老人ホーム、特に養護老人ホームっていうのは、基本的にはひとりで身の回りの世話はできるという人たちですから、あの集合の形式は考えてみると割と不思議なものだと思うんですね。お互いにそう積極的な理由があってあそこに何かひとつの家を形成しようという意思是ほとんどないだろうと。しかし、ひとりでは生きられない。やはり若い人よりは死ということをつもどこか頭の一角に考えている人たちです。

ですから、ある部分は人に頼りたいとか、自分の弱さを聞いてほしいとか、そういった思いを常に共有しながら、実はひとりひとりで住んでいる。そういう人達の集合なんですね。ですから、私は「ひとつの家」を建築で表現するということ避けたいと思った。それは、お年寄りにとっても何か重苦し過ぎるんじゃない

いだろうかと思ったのです。かなりあそこでは平坦な作り方をして、それでも真ん中に食堂とか集会室という、かなり中心的な空間を持ってきたわけですが、実際に話を聞いたり、何度も行ってみていると、あの中央の空間よりは、もう少しコーナーのような小さな空間をお年寄り達が好んで、そういうところへ小さなグループで集まりたがっているようです。そういうことは私にとって初めての経験であり、かつ、非常にいい経験であったように思っているわけです。

あんまり時間もなくなってきましたでしたが、最後にですね、熊本のアートポリスを体験されて、今後御自分の体験から、一体どんなことが期待できるのか。あるいはほかの単独にやるプロジェクトとは、明らかに違う何かがあるような気がしているんですが、そんなことを少し最後にお話しいただけますでしょうか。

坂本一成

今日、最初に私がお話ししました「建築がまちづくりに果たすべき役割」にふたつのことがあると。ひとつはやはりその街に面白い建築が、いい建築ができることによって、その街のイメージが上ったり、あるいはその街の雰囲気良くなるという何かを作る。先ほども伊東さんの八代での仕事がいくつか重なっていくうちに、かつて博物館の建設中に訪れた時と今回訪れた時と、街の印象が何か違うような気がするんですね。これは伊東さんの仕事の結果がその街に何らかの形で影響を与えて他の建築も良くなっているのか。あるいは私のほうがどこかでそのイメージの変更を迫られて、その結果そうなのか、まだわかりません。あるいは両方かも知れません。そういう可能性は十分ある。

今八代の例でお話ししましたが、熊本県という地域の例でも話ができます。最近若い人たちに聞くと、熊本県は良い建築があるところなんだと。現代の建築が、今何が問題なのかを知りたいければ熊本へ行くことだということを言われはじめています。アートポリスでの50某という実現した建築の数がこうした現実をつくりつつあるわけですね。

これは熊本県の地って言いますか既存の街、あるいはその田園があって、そこにひとつひとつのできた建築の、ネットワークがいつの間にかできている。そのネットワークが図となって新たな文化、地域性を作ってきてるのではないかと思います。これがもっともっと押し進められていけば、世界的に例のない、建築を前提としたひとつの大きな文化ができていくのかなということを、ますます感じ始めています。私自身、それに関わらせていただいた当事者のひとりでありますからちょっと言いにくいことではありますけれども、そんな感想を持っています。

伊東豊雄

ありがとうございます。元倉さん、いかがでしょうか。

元倉真琴

我々は東京から来ているわけで、僕の今日のスライドも東京じゃなければ出現

しないような建築のタイプもあったわけです。龍蛇平団地は出来上がってから2、3年経つわけですが、毎年状態が変わるのを少しずつ見えています。そうすると、そこでひとつ気がついたことがあるのは、小さいですがあそこに中庭があります。あそこの中庭を僕は基本的にはあんまり手を入れない格好で作ろうと考えたんですが、基本的に持ってる植物の生命力みたいなものにある程度委ねていこうというふうに思ったわけです。つまり、あれを僕の頭の中では実は田園というふうに思っていたところがあるんです。

どうも我々建築家が陥りやすいひとつのイメージがあるような気がしました。それは、都市の方だけをびしっと考えておけば、あとはどうにかなるんじゃないかっていうふうにどこかで思っていやしないか。その言い方をすると、田園というものをどうも都市の残りっていうふうに考えて、つまり都市のほうを切り取って考えてるんじゃないかというふうに何となく、僕はそういうふうに考えてきたらいがあります。

アートポリスは、都市の問題を論じる、ないしは考えるだけではなく、実は、田園の問題を考えることでもあったということに気が付きました。我々が都市の問題にするということは、実は裏返しにやっぱり田園をかなり問題にしていることだろうと。

つまり田園をネガティブ、余りのものとしてそういうものと捉えるんじゃなくて、例えば伊東さんの博物館のあの丘を定着させることが、あのプロジェクトのひとつの大きな意味合いだったと思いますし、僕のプロジェクトで言えば、中庭にある植物が取り合えず生育できる地域を確保するというのが、プロジェクトだったと思います。逆にそういう何か構築することだけではなくて、構築しない部分に関しての問題というものを、我々はやはり一緒に引き受けなくちゃいけないだろうなというふうに最近思っています。

特に熊本は、昨日からバスツアーで見ているように、非常に豊かな田園風景を持っている場所です。それと建築の関係というものを、これからアートポリスの主題のひとつとして、もっと徹底的にやるべきなんだろうなというふうに思いました。

伊東豊雄

まあおふたりの今のご発言で、まあほとんど私の言いたいことも言い尽くされているように思います。元倉さんは環境、その構築をつくることによって環境がつくられていくということ。そのことの重要さを大都市、東京とか大阪のような大都市にいと、なかなかかえって考えにくい問題を非常にクリアに考える、そういう場所になり得ているというふうに言われました。

また坂本さんがネットワークという言葉を使われる。これはまあ私も同じような印象を抱いております。どこかで公共建築を設計する時には、いつも自分の気持ちで、全世界を相手に自分がひとりで頑張らなくちゃならないというような気持ちになりがちなんですけれども、熊本にいと何かみんなが一緒にやっているという、みんな何かネットワークをはって新しいものを作っている。だから新しいものを提案することが当たり前なんだ、という気持ちになれるような気がするんですね。これは客観的に見てもかなり若い建築家の方々のプロジェクトが、その建築家の従来の作品に比べてかなり飛躍しているような気がするんですね。それは多分主催されている方たちがそれこそストレスを背負っておられるんだと思いますけれども、まあそれに甘えているのかも知れないですけれども、何か環境をつくるという意味でも、あるいは社会的なプログラム提案をするという意味でも、新しいことができるんだということを前提にしながら設計にかかれる、そういう非常に珍しいネットワークができつつあると思います。

私は、博物館をやっております時に、「アートポリスがもし10年続いたら相当面白くなるんじゃないか」と思っておりましたけれども、来年で8年ですから、10年続けられることは、恐らく疑いのない所だと思いますので、本当に感謝の気持ちと同時に、ぜひこれからも頑張って続けていただきたいと思います。

朝からここにおられた方は大変長時間で、しかも役者は変わらないので大変お疲れになったと思いますけれども、これで終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

司 会 パネリストの皆様方は長時間にわたりまして貴重なご意見を賜わり、誠にありがとうございました。ちょっと時間もおしてしまいまして質問の時間が取れなくなってしまったんですが、懇親会を5時半からロイヤルホテルでやることになっております。先生方もご出席いただけるということになっておりますので、もし何か質問とか、そんなお話しをしたいという方は、ぜひそちらの方にご参加いただきたいと思います。

これもちまして本日のプログラムは全て終了いたしました。八代市立博物館では、この隣ですが、27日の日曜日までアートポリス展を開催しておりますので、こちらの方も合わせてぜひご覧下さい。本日は「くまもとアートポリス・シンポジウム」にご参加いただきまして誠にありがとうございました。気をつけてお帰り下さい。

「くまもとアートポリス」事務局
熊本県土木部建築課内
〒862 熊本市水前寺6-18-1
電話096-383-1111（内線6215）